

若者へのメッセージ 16

第三回 当たり前前のごことが一番大切だ

武蔵野美術大学教授

関野 吉晴

長い旅をしてきて、私たちにあって最も大切なことは当たり前なことだと思ふようになった。病気になる時に健康のありがたみが初めてわかる。喉がカラカラに乾いた時に水のありがたみが分かる。当たり前前と思つてゐることは、それがなくなった時に初めて大切なんだと気がつく。

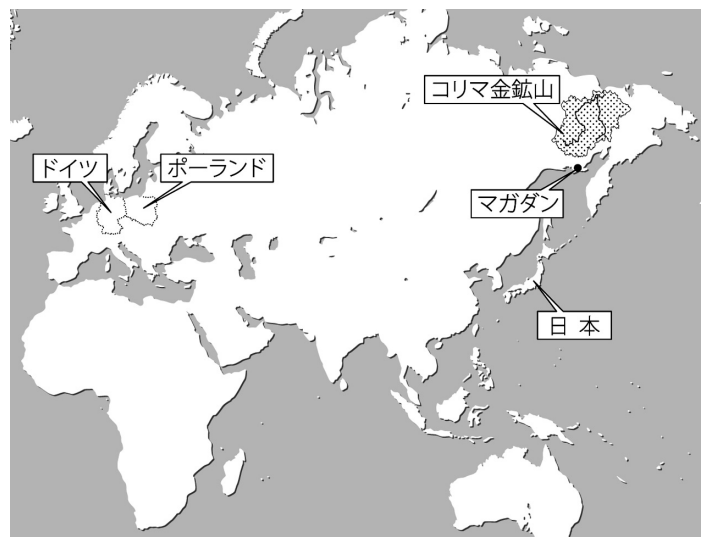
■ウラジミルさんとの出会い

ロシアの極北シベリアのコリマ街道で、第二次世界大戦中に強制収容所に収容されながらも生還した、ウラジミル・ロマナビッチ・フリストウツクさんと会つた。81歳とは思えないほどかくしゃくとしていて、私のインタビューにも快く応じてくれた。目の前にいるウラジミルさんを見ると、薄く

なつた白髪しろがみの下にある顔には、多くの皺しわが刻まれていた。目もよく見えないという。瞳が澱よどんでゐるので、たぶん軽度けいどの白内障はくくないに冒しょうされているのだろう。

■極寒のシベリア強制収容所送り

ウラジミルさんは、ポーランドの空軍将校だった。18歳で空軍の学校に入って3年を過ごし、それから各地へと派遣された。



しかし1939年、ドイツに近いポーランド領内でドイツ軍に捕まり、監獄かんごくに入れられた。そのうち他の4人のポーランド人將校とともに脱獄だつてきすることにした。脱獄は、監獄内外のポーランド人たちが綿密に計画した上で実行された。仲間たちは、パスポート代わりに新しい身分証明書まで作って待つていてくれた。5人はそれを持ってソ連領内へ逃亡することに成功した。だが、すぐにソ連の官憲かんけんによって逮捕たいほさ

れた。取り調べという名目で約1年半も拘留された。結局、まともな裁判は1度も開かれないままだった。そのころソ連の指導者スターリンは、外国人というだけでスパイ罪の汚名をつけ、冬は零下50度Cまで冷える極寒のシベリアに政治犯や一般犯罪人と共に強制収容所へ送り込んだ。

しかし、1948年の初めにオホーツク海に面したマガダンまで移送させられた。

戦後、中国やソ連、モンゴルにいた日本兵捕虜たちも一緒だった。マガダンに着くと、コリマ街道を通って金山きんざんに連れて行かれた。ここまで来る間にも、仲間の何人かは死んでしまったという。

収容所では、1人1人の収容者に番号が付けられていた。看守は、収容者の名前ではなく、背中に大きく書かれたその番号で呼んだ。ウラジミルさんは、かつてポーランド空軍にいた時期に、アリーナという女性と結婚し、一人娘をもうけていた。しかし、戦争中に奥さんは病死し、祖母に預けられていた娘もやはり病気で死んだという。

同じ空軍の兵士だった兄も戦死し、すべての肉親を失くしたとき、ウラジミルさんはもうこれ以上失うものはないと諦めたという。

■収容所から解放され

1949年、ようやく強制収容所から解放された。青空が目に見え、雲の形もいつものように見え、収容所の内と外では、世界がまったく違ったという。

その後20年近く経ってから、ウラジミルさんは、現在の夫人であるエカテリーナ・イエゴラナさん（62歳）と一緒に暮らし始めた。ウラジミルさん夫妻は2人とも年金生活者で、十分ではないが、家と畑を持つ老夫婦が慎ましく生きていくには、なんとかやっていける年金をもらっている。静かな暮らしのなかでは、お互いの会話が、ささやかな刺激になっているようだった。

力づくで祖国から離され、妻子とも別れ、強制収容所に入れられるという辛い経験を

持ちながらも、カトリック教徒のウラジミルさんは「自分は幸運だった」という。

ドイツ軍に撃たれて太股ふとももに傷を負ったが、弾が骨まで達しなかったので助かった、ドイツ軍の捕虜になっても、なんとか脱出できた、強制収容所で金山の採掘をさせられることもなく、軽労働ですんだ、解放されてからも良い仕事に就き、新しい妻ともめぐり会えた、きつと神様が自分を守ってくれたに違いない、と思っている。

1992年になって、ようやくウラジミルさんは「名誉回復証明書」をもらった。しかし、感激も、感動も、喜びもまったくなかった。それまでに36年間働いた木工所で何度か優秀労働者として表彰されたが、その時のほうがよほど嬉しかったという。「名誉回復」と言っても、特に何か新しく与えられるわけではない。

■なぜラッキーなんですか？

そこで、「私はラッキーだった」と言うウラジミルさんに、「強制的に何年間も辛

い思いをさせられて、なぜラッキーなんで
すか」と聞くと、「81歳まで生きてこれら
て、今、隣人と仲良くしながら、つつまし
いが穏やかな日々を送っています。それだ
けでラッキーです」という答えが返ってき
た。ウラジミルさんと話しているうちに、

緩急自在

The Great Journey.

2016年2月
関野吉晴

色紙プレゼントのお知らせ 関野吉晴先生ご揮毫の色紙を1名様にプレゼントいたします。官製はがき
に、「関野吉晴先生の色紙希望」と明記のうえ、「若者へのメッセージ」に対するご意見・ご感想を添
えて、編集部宛にお申込みください。締め切りは3月31日（木）です。ふるってご応募ください。な
お、色紙の発送をもって発表にかえさせていただきます。

私にはウラジミルさんがラッキーなだけで
なく、ハッピーに見えた。夫人とのつつま
しくもむつまじい暮らしに満足し、ふくよか
で、ゆったりとした顔をしている。

なぜ幸福そうに見えるのか考えてみた。
彼にとって大切な青春期を強制収容所で過
ごした。家族と一緒に暮らすことができる。
友達や仲間と自由に会える。好きなことを
言える。好きなところに行けて、好きなと
ころに住める。こういったことは多くの人
にとっては当たり前のことだろう。自分の
生まれた土地に戻ることで、特別大変
なことではない。

しかし、ウラジミルさんは長い間、そう
した当たり前のことができずに生きてきた。
当たり前のことが、本当に大切であること
を、身をもって経験してきた。そのため当
たり前のことがいかに大切であるかを誰よ
りも身に染みて知っている。今それをかみ
しめ、味わって生きている。そのためウラ
ジミルさんはとても満ち足りて、幸福そう
に見えたのではないだろうか。